

皇帝文書確認官アレクシオス・パレオロゴス・ツァンブラコン：歴史家ゲオルギオス・スフランヅィスの義父、その系譜学及びプロソポグラフィー

平野智洋

本報告は、歴史家ゲオルギオス・スフランヅィス(Γεώργιος Σφραντζής)の義父である皇帝文書確認官アレクシオス・パレオロゴス・ツァンブラコン(Ἀλέξιος Παλαιολόγος Τζαμπλάκων, Alexios Palaiologos Tzamblakon)の系譜を再構成し家門史について考察する事を目的としている。

ニコリッチ(M. Nikolić, 2010)による最新の論考は、アレクシオスがミハイル8世パレオロゴス帝(r. 1259-82)の子孫である事を指摘し、スフランヅィスのキャリア形成に関する彼との縁戚関係の重要性を示している。ツァンブラコン家の家系史に関しては、バネスク(N. Bănescu, 1930)及びセオハリディス(G. I. Theocharidis, 1961-63)のプロソポグラフィー研究によってある程度の概要が示されているものの、その起源(語源・血統)については関連史料となる、マルコス・エフゲニコス(Μάρκος Εὐγενικός, 15世紀)による『ディミトリオス・ツァンブラコンの子供達の墓によせて』の解釈を含めて不明な点も多い。スフランヅィス著作『回顧録』ではツァンブラコン家、スフランヅィス家その他を取り巻く複雑な縁戚関係が描写されており、その文脈を正しく理解する上で、上記史料を再解釈しツァンブラコン家の起源に関する問題を検証する必要がある。更に、ツァンブラコン家とスフランヅィス家との婚姻関係が何故に成立し、そしてそれがどのような成果をもたらしたのかについては、ニコリッチの研究に於いてもそれほど深く踏み込まれておらず、更なる考察を必要としている。

こうした研究状況を踏まえ、本報告では第一にツァンブラコン家の起源の問題について当該史料を検証してその確定を試みる。次いで、スフランヅィス著作によるツァンブラコン家の記録を再整理すると共に、同時代の他史料からの情報を総合して14-15世紀に於けるツァンブラコン家の社会的地位などを明らかにする。これらの分析を基に、スフランヅィス・ツァンブラコン両家の婚姻による結合がそれぞれに何をもたらしたのかを改めて考察する。ツァンブラコン家はマケドニア地方を中心としてバルカン世界に広く活動した家門であり、アレクシオス・パレオロゴス・ツァンブラコンを通じて15世紀に於ける同家の動向を知る事は、単純に縁戚となったスフランヅィスの官人としてのキャリア形成と社会的地位を解明するというに留まらず、ビザンツ・オスマン両帝国を取り巻く国際状況の変化の中で、一ビザンツ家門や個人がどのような選択と行動を取ったのかを示す一事例を提供するものと期待する。